

---

# 退魔物語

たぶんKさん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

退魔物語

### 【Nコード】

N0266D

### 【作者名】

たぶんKさん

### 【あらすじ】

闇に存在し人に害を成す者達は『妖魔』『魔獣』と呼ばれ、人に恐れられた。だが、そんな闇と闘う者達も存在した。これから始まる物語は若くして闇と闘う者達の物語である。

## 第一話『魔闘士』

この世界の闇に存在し、古の時代から人に害を成す者達は『妖魔』『魔獣』と呼ばれ、人達から恐れられた。

だが、その者達から人を守る為に存在し、闇と戦い続ける者達も存在した。人は彼等を『魔闘士』と呼んでいた。

その戦いは、現在に至る今も続いている。

これから始まる物語は、若くして闇と戦う者達の物語である。

日が沈み始めた頃、人里から離れた森の奥。普通の人間なら訪れないであろう場所に二人の人影があった。

一人は黒髪に右が紅で左が蒼で左右の色が違う瞳を持つ青年で黒のロングコートに両手に指なしグローブ、衣服は黒一色に染めている。もう一人は茶髪に黒い瞳に今時の若者の様な私服に近い格好で左手の人差し指にシンプルな指輪をしている青年。

二人とも同じ年位で森の中を歩いていた。

「飛鳥<sup>あすか</sup>・・・その格好暑くない？」

茶髪の青年が黒髪の青年、飛鳥に問いかける。

現在の季節は夏の少し前で暑くなり初めて時期。

「別に。それよりも此処か？<sup>じゅう</sup>流」

素っ気なく応えて、茶髪の青年、流に問いかける。

「ああ、この土地に妖魔が大量発生した」

何処か、嫌々応える。

この二人は魔闘士であり、妖魔と戦うのは珍しくない事である……だが

「またか……」

「最近、多いよね」

そう最近になり妖魔が大量発生する事が多くなってきたのである。

「真風で何かわかってないのか？」

「天武と同じ」

真風、天武とは、日本内の退魔組織の五大勢力内の二つの一族であり、飛鳥は天武の、流は真風の次期宗主である。

「何も解ってないのか」

「お互い様だろ？飛鳥」

流の言葉に苦笑して

「そつだな」と応える飛鳥が、急に真面目な顔になる。

「流！」

「解ってる！」

周りの邪気の気配に警戒する二人。

「妖魔の数は？」

「三十、四十・・・それ以上」

拳を構える飛鳥に、応えて流も風を纏う。

魔闘士の戦い方は共通して『気』と言う力を使うが、その使い方は一族や使用者によって様々であり、大別して強化、性質変化、放出、形体変化の四つに分けられる。

今の状態では飛鳥は肉体の強化。流は風の性質変化をして辺りの警戒に当てた。

「前衛が俺、後衛が流でいいな」

「OK、来るぞ」

流の言葉通り、前方の林から悪魔の様な妖魔が現れるが、その瞬間。

「妖魔だ」

気を込めた拳を叩きつけて妖魔を消滅させる。破拳、拳に気を込めて殴りつける。天武の初歩の技。

「次」

両手を開き、指に気を込める。そして向かってくる数体の妖魔を引き裂く。気を爪の様な形体に変えて引き裂く、天武の技、龍爪。

「雑魚が」

そう言つて、一旦動きを止めた瞬間。

「ガァー!!」

背後から一体の妖魔が襲い掛かるが、風の刃が妖魔を切り裂き消滅させる。

「飛鳥、今の奇襲解つてたろ？」

「流が居たから任せた」

「・・・自分で倒せよ」

文句を言いつつ近くに來た妖魔に風の刃を飛ばす。  
真風の性質変化の技、風刃。

「まだまだ、来るぞ」

「面倒くさいな」

更に向かつて来る気配を感じて言つ、飛鳥。片手に風を溜めながら愚痴る、流。

妖魔が再び現れた瞬間、片手に溜めて風の塊を放つ。  
そして数多くの妖魔を消滅させる。

風弾、風の塊を放ち多くの敵を倒す、真風の技。

「余りが出てるぞ」

流の技で倒しきれなかった妖魔を飛鳥が破拳と龍爪で倒す。

「今度は囲んできたか」

飛鳥の呟き通り妖魔が二人を取り囲む。

「背中任すぞ」

「任せろ」

飛鳥が再び拳を構え、流は両手に風を溜める。

「一体たりとも逃がすなよ、流」

「当たり前だ」

そして、戦いが再開する。・・・いや、これは戦いに有らず、一方的な殲滅。

飛鳥は破拳、龍爪で向かって来る妖魔を倒し、流は遠近関係なく妖魔に対し風刃、風弾を放ち倒す。

妖魔の攻撃は全て交わされるか、防がれるかのどちらかであった。そして、十数分後には百体近い妖魔を全て蹴散らした。

「今回は一段と多かったな。・・・って、どうした？」

何か考え込んでいる、飛鳥に話し掛ける。

「いや、何か嫌な予感がしてな。」

「この妖魔の大量量発生にか？深く考え過ぎるなよ、単なる偶然かもしれないから」

「だと、良いのだが。・・・流、まだ一体向かって来ているぞ」

一体の妖魔が向かって来る気配を感じて、戦闘体勢をとる、飛鳥。

「次で終わりだな」

そして、流もまた風を纏い戦闘体勢をとる。

「妙な気配だな・・・」

「どうした？飛鳥」

「気を付けろ、流。何か変な気配だ・・・例えるなら、混ざったものの」

「普通の妖魔じゃないってことか？」

「・・・そうだ。来るぞ」

前方から姿を現す妖魔を見る、二人。そして

「・・・なんだよ、アレ!？」

「・・・鬼の変種か？」

驚きの声を出す、流と内心では驚いているが顔に出さない、飛鳥。



「鬼の変種」飛鳥の言った通り、普通の鬼ではなかった。  
その妖魔は鬼の体と顔だが、両腕は普通の鬼の様な剛腕ではなく、  
バルカン砲となっている。

そして、両足は狼系統の妖魔の後ろ足の様な形になっている。

「ガアアアー!!」

雄叫びを上げて両腕のバルカン砲を飛鳥、流に向けて乱射する。

「何がどうして、鬼の腕がバルカンに？」

「弾丸は気で造られた物か？余り良い完成度とは言えないな」

流は疑問を言いつつ、飛鳥は武器の性能を評価しながら、  
弾を交わして後方に退く二人。

「飛鳥、どうする？大技を使うか？」

「あの程度なら武器で充分だ。

・・・銃撃が止んだ？」

銃撃が急に止み。二人が鬼の方を見ると

「アアアー！」

二人が退いたのをチャンスと見たのか、走って追いかけて来る。狼の  
足を持つだけに速い。

「調子に乗ってるな。流、アイツの動きを一瞬止めるから、あのバ  
ルカンを斬り落とせ。止めは俺が刺す」

「OK」

流の返事を聞いて、鬼に向かって走り出す。鬼は両腕のバルカン砲を飛鳥に向けるが

「遅い」

鬼が射つよりも早く、跳びヒザ蹴りを顔面に決めて、もう片足で鬼を台にして真上に跳び上がる。  
それを見た流が

「出る、天風」

その言葉と同時に左手の指輪が光り、左手に鞘に収まった刀が現れ、右手で柄を握り

「その腕、貰うぞ」

鬼に向かって速攻で走り出し、鬼の脇を走り抜く瞬間、刀を抜き放ち両腕を斬り落とす。

「ガアァー、アァー!!!」

感覚があつたのか、悲鳴を上げるが

「うるさい」

上空の飛鳥が言い放ち、両手を鬼の方に向ける。

「双銃、魔狼」

その言葉が出た瞬間、両手の手のひらが光り、銀色の双銃が握られている。

「消え失せる」

銀の魔銃から放たれた魔弾が鬼に当たり、鬼を闇に引きずり込み消滅させる。

「終わりだな」

地面に着地して呟く、飛鳥。

「何だっただ、あの鬼は」

天風を鞘に戻した流が、飛鳥に問い掛けるが

「わからん、だがあのバルカン・・・人工物だ」

死ねば消滅するはずの妖魔の絶対的な法則。だが、あのバルカンは消えることなく存在していた。

「これは調べて見る価値がありそうだな」

魔狼を消してかたずけて、携帯を取り出したが、その途中で流を見て。

「・・・いつまで、天風を出している？」

「ちょっと、召喚器の調子しが悪くてな」

召喚器、武器などを出し入れできる、収納ケースの様な物。飛鳥の場合は両手のグローブ、流は左手の指輪、と様々な形がある。先ほど、武器を出したのも召喚器が有ったから出来たのである。

「帰ったら見てやるよ」

「サンキュー。・・・で連絡は？」

「それがな、圏外になっている。・・・流、帰り道分かるか？」

「いや。・・・まさか」

「遭難したな」

次の瞬間、流の驚きの声が森に響き渡った。

## 第二話『現状』

森から、なんとか帰還出来た二人は自分達の通う京都の学校に居た。

「眠い・・・」

学校の屋上で欠伸をしながら呟く、制服姿の流。その隣では無言で立っている、同じく制服姿の飛鳥。

「土日が仕事だったから休んだ気がしないな」

「日曜は遭難で潰れたがな。・・・今度からは位置確認しよう」

飛鳥の言葉に苦笑する、流。二人は土曜の夜から遭難して昨日、救出されたのである。

「時期宗主として色々な経験を積み、と言われたが遭難も経験した方が良いのか？」

「できれば、積みたくない経験だな・・・。しかし、親父達も人使いが荒いよな」

「確かに」

同意したように頷く、飛鳥。

実際、親である現天武、真風宗主は二人に多くの経験を積ませ様としているので二人はよく仕事に送られる。

「そついえば・・・これ返す」

思い出した様に昨日点検の為に借りた、流の指輪を渡す。

「直したがもう少し大切に扱え」

「ああ、気を付ける。ところで『アレ』はどうだ？」

指輪をはめながら鬼の変種の事を聞く。残ったバルカン部分を天武が持ち帰り解析をしているのだ。

「・・・まだ細かい事は解らないが・・・あの妖魔は人為的に造られた可能性が高い」

「人為的に・・・そんなことが可能なのか？」

「今のは可能性の話だ。天武で残ったバルカン部分を解析が終わればもう少し解る」

天武は五大勢力の中で唯一術より体術、武術を得意とし、同時に武器製作も得意としているので解析などそういったことが可能などである。

「・・・人為的なら俺達、真風も忙しくなるな」

真風は性質変化による風術を得意とし探査、調査に秀でているので人為的な場合なら彼等、真風は忙しくなるだろう。

「同盟内には通達すると思うか？」

「・・・人為的な場合はそうなるだろう」

少し間を開けて答える流。

退魔より確実に行う為に天武が提案したのが同盟。協力して退魔をするのが目的であり、現在では日本内の退魔組織、魔闘士の七割が所属する組織であるが、考え方、退魔の手段などが異なるので完全な協力体制とは言えないのである。

五大勢力の内、天武、真風を含む四つの勢力が入っているので保険の為に入っている組織もある。

「情報が集まるだろうが、内通者が居たら此方の情報もばれるな」

「飛鳥、いくらなんでも・・・ないとは言えないか」

「まあ、どうするかは親父達が考えるか・・・」

「その前に結果待ちだろ」

流の言葉を最後にその話は終わる。

「飛鳥、今日の放課後暇か」

「時間は空いている。何か用が有るのか」

「飛鳥、俺達まだ十七だろ？」

「？ああ」

いきなり何を言っているのか意図が掴めないながらも返答する、飛鳥。

「青春を楽しみたい年頃だと思わないか!？」

「・・・ナンパか？」

「いや、合コンだ!」

力強い声で言い切る。

ここで流が言いたい事を理解した。

「・・・俺にも参加しろ、と?・・・断る」

「今回は拒否させないぞ!リクエストで飛鳥を連れて来て欲しい、  
と言われたからな」

「・・・」

妙にテンションが高い流にどう対処すべきか悩み始めた飛鳥。

「・・・俺が行っても場が白けるだろう」

「大丈夫!飛鳥は顔が良いし、盛り上げるのは俺に任しとけば大丈夫だ!」

更にテンションが高くなる。

「なんでそんなにテンションが高い？」

「久しぶりに騒げるからな!楽しめる時に楽しんでおかない損だろ?！」

「・・・まあ、そうだな」



仕事が多いだけでなく、修行などの時間も確保しているので自由の時間が少ない二人には同年代と楽しめることなどたまにしかない。

「・・・たまには良いか」

「よし！」

たまにしかないない、時間だが友に付き合つのも悪くないという事した飛鳥だった。

### 第三話『今後』

合コンから数日後、廃墟となった工場の中で飛鳥と流は妖魔と対峙していた。

「今度は・・・ケルベロスもどきか？」

飛鳥の前には三つ首に鎧をつけられた狼系統の妖魔が唸り声を上げて威嚇している。

「此方は・・・虎と鬼？合わせてタイガー鬼、または鬼虎かな？」

流の前には鬼の体に虎の様な模様があり、指には鋭利な爪、口には鋭い牙が生えている。

「コイツ等も人工妖魔だな」

飛鳥が嫌な顔をして呟く。

人工妖魔、以前の鬼の変種が人為的に造られた事が判明し、それに似た妖魔、もしくは同じ様に人が手を加えたと思われる妖魔が発見され、それ等を総じて『人工妖魔』と命名した。

「妖魔の大量発生のもも解決してないってのに」

「まったくだ。仕事を増やすな」

人工妖魔に文句を言う、飛鳥だが返ってきたのは唸り声だけ。

「今日から見たい刑事ドラマがあるから、さっさと終わらせるぞ」

両手に風を溜めて、風刃を鬼虎（？）に打ち出す。

「それ・・・明日からだぞ、放送」

流に突っ込みを入れながらも拳を構え、襲い掛かるケルベロスもどきに応戦する。

「頑丈だな」

流が人工妖魔の攻撃を交わしながら呟く。

風刃を幾つも叩き込んでも多少のダメージしか与えていない事が解り、どうするか悩み始めた。

「風弾きかないし、天風ないしな・・・」

研いで貰う為、研師に渡したので現在しようできる武器がない。

「仕方ない」

一旦間合いを開けて向かってくる人工妖魔に右手を掲げる。その手には風の塊が渦を巻く。

「死んでくれよ」

手のひらに出来た小さな竜巻を放ち、人工妖魔に当たり風の渦が人工妖魔の動きを止め、同時に切り裂き消滅させる。

旋風弾、風の渦で敵の動きを止め、中の敵を風で切り裂く技。

「あー、やっぱり周りがズタズタか・・・まあいいか」

妖魔が居た所を中心に周りがぼろぼろになってしまったが、廃墟だから問題ないと言う結論に至った、流だった。

「流の方は終わったのか・・・」

飛鳥と戦っている人工妖魔はもう既にぼろぼろで動く気配はない。

「此方も終わりか・・・頑丈なだけだな」

飽きた様に呟き、人工妖魔に背を向け歩き出そうした瞬間

「グアァー!!」

最後に一矢報いる為に襲い掛かるが

「うるさい」

感情も何もない声で回し蹴りを放つ。回し蹴りが当たった瞬間、人工妖魔が真つ二つになり消滅する。

閃断脚、足に溜めた気を刃状の形体に変えて敵を蹴ると同時に斬る事が可能。

「終わりだな」

先に妖魔を始末した流の方が飛鳥に話しかける。

「そうだな」

「じゃ、帰るか」

「ああ」

流に返事をして廃墟を後にする二人。

「もう少しで夏休みだな」

暗くなってきた帰り道で、いきなりそんな事を言う、流。

「・・・そうだったな」

「忘れてたのか？」

「忙しいからな」

「そうだな、最近になってから仕事が増えたからな」

妖魔の大量発生、人工妖魔の出現で二人が仕事に出るのも多くなってきた。

「それで本題は？」

「ああ、夏休みの間は仕事で飛鳥とは暫く組めない」

「・・・そうか、各地の調査か？」

「正解。大量発生の原因の調査で霊地や重要な封地に行くことになった」

霊地、封地、星に流れる気脈と呼ばれる力を利用、封じた土地の事である。

「丁度良いな、俺も仕事で居なくなるから」

「飛鳥も？・・・どっちにしろ、暫くコンビは解散か」

寂しそうに言う、流だが

「コンビ？・・・俺が突っ込みで、流がボケか？」

「いやいや、そういうコンビじゃないから。後、どっちかって言う  
と飛鳥がボケだろ」

飛鳥のボケに突っ込んで元気になる、流だった。

「・・・ボケコンビ？」

「俺もボケにしたいのか！？・・・まあいい、飛鳥は何処に仕事で  
行く？」

「沖縄の水瀬の所に」

水瀬、水術を得意とする五大勢力の一つの一族。

「武器造りにか？」

天武の次期宗主だけに、飛鳥は武器造りにも長けている。因みに、流の天風、飛鳥自身の魔狼は飛鳥の作品である。

「そつだ」

「・・・気を付けるよ。飛鳥は沖縄で死にかけたんだからな」

飛鳥は十歳の頃、ある原因により沖縄で妖魔に殺されかけた過去を持っている。

「まあ、今の飛鳥ならそんな事にはならないか」

「・・・だが、気を付ける様にしよう。流も気を付けるよ・・・風邪に」

「風邪にかよ！」

何処か違う心配をする飛鳥に流が突っ込みを入れる、やはり、飛鳥がボケで流が突っ込みの様だ。

## 第四話『再会』

「やはり・・・慣れないな」

沖縄行きの飛行機の中で外を眺めている飛鳥が呟く。苦手と言っわけではないのだが、乗り物に乗るのはあまり好きではないらしい。

「しかし、あの時親父が言っていたことは何だったんだ」

沖縄は行きの前日のことを思い出しながら呟く。

前日

「飛鳥。明日から水瀬の所に行ってもらうが失礼のない様にな」

黒髪に蒼い瞳を持ち胴着を身に纏い、つい先ほどまで飛鳥と組み手をしていた現宗主にして、父の天武飛燕が飛鳥に言い放つ。

「わかつてる」

「・・・やはり、子供の一人旅は心配だな」

「こつそり、ついてくるな・・・後、分家の護衛もいないからな。」

ただでさえ、忙しい時なんだから」

妖魔の件などで多くの退魔組織は忙しいのである。

「・・・・・・・・そんなことはしない」



「（今の間は・・・）」

本当に大丈夫なのか、不安になる飛鳥だが、飛燕は話を続ける。

「もう一つ、水瀬の宗主がお前に話があるそうだ・・・内容は直接聞いてくれ」

「俺に・・・？」

回想終了

「（宗主である親父ならともかく・・・俺に話しとはなんだ？）」

次期宗主とは言え、違う一族の宗主が話を持ちかけることなどそうあることではない。

「・・・行けば分かるか・・・観光してから帰ろうかな」

考えていても分からないと思い、仕事の後に観光しようかどうか悩み始めた。

那覇空港

「・・・迎えが来るらしいが何処だ？」

沖縄空港に着いた天牙は辺りを見渡すが迎えらしい人は見えない。

「・・・・・・・・待つか」

迎えが来るなら、少し待てば来るだろう。来なければ直接向かえばいいだけこと。

荷物を持ち近くのベンチに座る。

「（・・・・・・・・それにしてもあれから・・・・七年か）」

沖縄にきたせいか、十歳の時に死にかけたことを思い出す。

「（未熟だったな・・・・）」

昔を思い出す様に懐かしむ。

七年前、沖縄に来たのは退魔組織同士の交流を兼ねた目的でこの地には、父と流で来たのだった。流の父はその時は外せぬ仕事があったので来なかった。

交流と言っても、お互いの技量の確かめる為でもあるので宗主同士の組み手と言う形だった。

組み手が終われば、互いの退魔状態の確認をする。

それには子供であつた飛鳥、流にはつまらないだろうと、海で遊んでくる様に言われたかそれが失敗だった・・・・。

「（そして・・・・・・・・愚かだったな、あの頃は・・・・）」

海で遊んでいたとき、妖魔に襲われた・・・・それだけなら逃げれば良かった。いや、当時の実力でも倒せる程の妖魔だっただが・・・・

「すみませんが・・・天武飛鳥さんですか？」

「ん？」

昔を思い出すのをやめて声をかけてきた者を見る。

そこには黒の瞳に空に近い蒼の長髪を後ろで束ねた私服の女性。

「水瀬・・・春華か？」

昔の記憶を掘り起こし該当する人の名を呼ぶ。

水瀬春華、水瀬一族の次期宗主『候補』である人物。

「は、はい」

「久しぶりだな・・・元気そうで何よりだ」

「飛鳥さんも元気そうですね」

「そうか？・・・迎えは春華だけか？」

「いえ、姉さんも一緒ですよ。今は手分けして探していたので」

「春那もか・・・」

それを聞いて複雑そうな顔をする。

「・・・アイツ、方向音痴じゃないのか？」

「さすがに迷いませんよ、空港内を探していますから」

「それなら、良いが」

「京都より御越しの天武飛鳥さま、空港ロビーにて水瀬さまがお待ちしています」・・・見つからないからの呼び出しか？」

「・・・どうでしょう？」

空港内で迷ったのか、見つからないから放送で呼んだのか、できれば後者であって欲しい。

空港ロビーに行くとき春華と同じに髪と瞳に長い髪をポニーテールにした女性、水瀬春那がいる。

「春華！・・・その目は・・・飛鳥！」

「目？そこしか印象はないのか？」

「そこが一番印象に残るのですよ」

春華に言われてそう言うものと、納得する。

「飛鳥！久しぶり！元気だった？」

「ああ、春那は元気そうだな」

「当たり前だろ」

春華と違い、フレンドリーな態度で飛鳥と接する春那。

「飛鳥はどこに居たんだ？」

「ベンチに座っていた。それよりも迷ったのか？」

「え！？そ、そんなわけないだろ」

「目が泳いでいるぞ」

まさか本当に迷っていたのか、と呆れながらも変わっていないと懐かしくもなる。

「しかし、迎えが次期宗主候補とは・・・それとも、もう決まったのか？」

「いえ、まだです」

春華がすぐに答える。

次期宗主候補、宗主はその家、長男か長女が継ぐのだが双子の場合は力が強い方が次期宗主となる。

春華と春那は双子の姉妹にして力も同じ位なのでどちらが宗主なるか決まっていない。

「ですが、もう少しで決まります」

「そうなのか？」

「飛鳥に協力してもらいたいなことを言ってたな」

「何？」

春那の言葉に疑問の声が出る。次期宗主を選ぶのに飛鳥に協力してもらっわけがない。

「ではそろそろ参りましょうか」

「・・・ああ」

悩んで答えがでないのととりあえず会って話を聞くしかない。  
この時は飛鳥は思いもしなかっただろう。大変なことになるとは。

## 第五話『悩み』

「お久しぶりです」

「飛鳥君も久しぶりだね。元気だったかい？」

水瀬邸にて水瀬宗主にして春華と春華の父、水瀬志月に挨拶していた。

「はい」

「それはなによりだ」

「・・・この度の武器製作の依頼は、この天武飛鳥が勤めさせていただきます。若輩の身ではありますが必ず満足する武器を造り上げます」

「・・・相変わらずだな」

親しくない目上の人には礼儀を持って接するのが飛鳥なので、七年前と同じ態度でいる。

「仕事ですので」

「・・・まあいいか。春那と春華の武器を造るのが依頼なのは知っているな？」

「当然です。武器を使った戦闘方法を二人に教えることも含めた依頼であることも」

「・・・それとは別に君に相談したいことがある」

「何でしょうか？」

次期宗主を決めることに関わる事だと聞いたがどのような内容かは見当がつかなかった。

「重要なことだ。心して聞いてくれ」

「・・・・・・・・」

「春那と春華・・・どちらが好みかな？」

「・・・・・・・・は？」

予想外の問い疑問の声が出る。

それと宗主を決めることに何か意味があるのだろうか？

「・・・それはどういう意味がある問いなのですか？」

「そのままだが・・・飛燕さんから何か聞いていないのかな？」

「父からは話がある、とだけ聞いています」

嫌な予感を感じながら答える。

「直接聞いてみる、と言つてたからな。確かに本人の意思が大切だしな・・・」



「？」

一人納得している志月を見て何のことだかわかっていない飛鳥は疑問しかない。

「仕方ない、簡潔に言うからよく聞いてくれ」

「はい」

「春那か春華を嫁に貰ってくれないか？」

「・・・・・・・・・・は？」

予想外にして理解できる範囲を越えた問いに呆然とする飛鳥。

「あの、それは冗談ですよね？」

「冗談ではないよ」

「・・・・・・・・」

爽やかな笑顔で返答され言葉が出てこない。

違う退魔一族同士の結婚はないことはないが本当に極僅かな前例しかない。

それが宗家の直系同士だと前例さえない。

「まあ、急には決まらないか。まずは依頼を頼むよ」

「・・・・・・・・はい」

その夜、水瀬邸の飛鳥が泊まっている一室にて

「・・・何故だ？」

今日一日のことを思い出して、何故こうなったかを考えていた。

「親父、何故話さなかった？こう言った話は苦手なのは知っているだろうが・・・戻ったら殴ろう」

飛燕に対して報復を決めてこれから、どうするかを考え始めた。

「どうする・・・」

逃げるのは却下、仕事がある以上、逃げる訳にはいかない。

次、断る・・・一番妥当だが退室する時に

「断ったらどうなるかわかっているな？」と言われ、断るなどしたら命が危なくなるので却下した。

「・・・困ったな」

本当に困っているのだろう。一人独り言が多くなっている。

「この地にくると何かしら問題が起きてる様な気がするな・・・」

半分呆れた様に呟く。

二回しか訪れないのに何故かそう思う

「まずは仕事だ・・・それからどうするか考えよう」

問題を先送りしてしまうが今は休もう、と決めた。

数週間後

「（そろそろ、やばいな・・・）」

武器製作が終わり、二人に武器を使った戦闘を教えている最中、あの話をどうするか考えていた。

「飛鳥さん？」

「・・・どうした？」

春華が急に話しかけてきた。

「いえ、先ほどからずっと悩んでいたのさ」

「もしかして、婚約の話で悩んでいるのか？」

春華が正解を言う。

他に悩むことなんて今のところない。

「そっか・・・」

「・・・やっぱり、嫌なのか？そっかだよ・・・七年前、ある意味では私達が飛鳥を殺しかけたんだから」

七年前、飛鳥が死にかけたのは二人が原因だった。

七年前の妖魔は人に寄生して人を襲う、珍しい妖魔だった。そして、その時に寄生されたのは春那と春華の友人だった。その寄生された友人は海にいた飛鳥と流が近くに現れた邪氣を探っていた時に発見した。

だが、当時の二人には妖魔に寄生された人間の救出など出来なかった。飛鳥は時間稼ぎをして流が応援を呼んでくる、ということ。飛鳥が戦闘をした。

「あの時、妖魔をしなければ」

春那が後悔した様に呟く。

飛鳥が戦闘を開始してから少し、春那と春華がやって来たのだった。彼女等もまた近くの邪氣を感じて訪れたらしい。

そして、飛鳥が友人を攻撃しようとしているのを見て、二人が止めようとした。

そのせいで飛鳥に隙が出来てしまい、妖魔の大量の邪氣が込められた一撃が飛鳥に届いた。傷自体は酷いものではなかったが、妖魔の邪氣が体内に侵入してそれが原因で危うく死にかけたのだった。事実、飛燕達が遅れて来ていたら死んでいた。

「もっと冷静でいられたら、飛鳥さんは・・・」

今度は春華が呟く。

「友人が目の前で襲われていたんだ・・・二人の行動は悪くない。・・・お互い未熟だったが一番の原因だな」

軽いフオローを春那と春華に入れる。

実際、二人が冷静であったなら、飛鳥も隙をつくらなかったなら結

果は変わったかもしれない。

「・・・一つだけ言わせて貰うが、別に二人を嫌っている訳ではないからな。」

あの時のことはもう謝罪を受け取ったからな」

「・・・本当ですか？」

「嘘じゃないよな？」

春華と春那が不安そうに聞いてくる。

「嘘ではない。後・・・婚約の話は二人はどう思っている？」

「そうだね・・・飛鳥はいい男だしタイプだから、私は良いけど」

春那、普通にOKらしい。

「私は、そ、その・・・飛鳥さんに一目惚れしていましたので」

七年前からOKな春華。

「・・・冗談だろ？」

「「本気<sup>です</sup>」」

余計やばくなった気がする飛鳥は一体何が悪かったのか悩み始めた。

「（何がいけなかった？初めて会った時、笑顔で挨拶したのが悪かったのか？

それとも・・・二人と友達になろうとして積極的に関わり過ぎたか？」

当時の飛鳥は今より友好的で多くの人と友達になろうとして頑張っていて、笑顔の似合う少年だった。今も笑えば似合うが。

「（何がいけなかったんだ？）」

多少、女難の相があることを知らない飛鳥には分からなかった。

## 第六話『厄介』

「どうした？こんなものか」

「まだまだ！」

水瀬の道場で飛鳥と春那が戦闘訓練をしていた。春那の両手には小太刀が一本ずつ握られており、飛鳥は片手に鍰なしの両刃剣を握っている。

「ハア！」

斬りかかってくる春那に対して剣で全て防ぐ飛鳥。

「やはり、攻撃が単純過ぎる」

飛鳥が指摘すると同時に小太刀を剣で弾いて春那の首筋の直前に剣を向ける。

「もっと速さと力をつけろ、もしくはフェイントなどを使え」

剣を下げて、言い放つ。

「飛鳥にはまだ勝てないか」

「そう簡単に負ける訳にはいけないのでな。だが、筋は良いぞ」

不満そうに言う春那に対して、飛鳥は少しは誉める。

「次、春華」

先ほどの戦闘訓練を端で見ていた春華を呼ぶ。

「お願いします」

両手に鉄扇を持った、春華が飛鳥の前に出る。その間に端に行く春那。先ほどから順番で模擬戦闘をしているが飛鳥に疲れの色はない。

「いきます」

「ああ」

鉄扇を構え、飛鳥との戦闘を開始する。

数時間後

「今日はここまでにするか」

あれから何度も戦っていたのに顔色一つ変えていない飛鳥だった。

「終わったー」

「ありがとうございました・・・」

それに対して疲労感が現れている二人。

「（二人とも筋が良い・・・このままだと、俺が不味いな）」



水瀬宗主、志月に

「武器で自分に一撃を入れた方と婚約する」と問題を先送りにする為に言ってしまったが、このままだと・・・水瀬の次期宗主と同時に飛鳥の婚約が確定してしまう。

「（二人とも良い奴なんだけど・・・致命的な欠点があるだよな）」

この数週間でわかったこと。

春那は究極の方向音痴で観光案内を頼んだら・・・一日迷うことになった、観光案内位なら出来ると思った甘かった。それだけでなく買い物ですら迷うらしい。

春華は料理が趣味のわりに味が酷い、頼まれて味見をしたら死にかけた。・・・あれが毎日続いたら死ぬ、確実に死ぬ。しかも笑顔で聞かれるだけに断り難い。

「（もう少し・・・自由を満喫したいな）」

現実逃避、直前の状態になってしまった。

「・・・ハア」

「溜め息なんかついてどうした？」

突然、飛鳥に話しかける者がいた。

「色々あるからな・・・って！流！？」

「久しぶりだな」

そこには現在仕事で日本各地の封地を調べている筈の流がいた。

「流？・・・真風流？」

春那が確かめる様に聞く。

いきなり現れた事については突っ込まない。

「そう。二人とも久しぶり」

「それより、どうして此处に？」

「仕事のついでに飛鳥の婚約者と次期宗主に挨拶に」

飛鳥に対して微笑みながら言うが

「誰からその話を聞いた？それにそれだけじゃないのだろう」

それだけじゃないのはすぐに解った。

わざわざ、流に行かせる位なのだ、ただの仕事ではないだろう。

「それも本題なんだけどな・・・調査報告書を届けと飛鳥に依頼を届けに。」

話は飛燕さんから聞いた。それでどっちが婚約者？」

「・・・ハア」

どうしても聞いてくる、流に諦めさせるのは無理そうだと飛鳥の方が諦めた。

「・・・まだ決まっていない。仕事の内容は？」

「まあ、待て。水瀬宗主にも話さないとだから一緒に聞け」

「宗主の所に行つてないのか？」

「行つたけど、飛鳥とその二人にも関係あるから呼びに来た」

「私達にもですか？」

「多分ね」

春華に答えるが自信がないのか

「多分」らしい。

「ただ一つだけ言えることは、厄介なことだけ」

「・・・厄介？」

流の言葉に疑問を浮かべるがそれ以上ここでは言う  
気がない様だ。

水瀬宗主の部屋

「では、話を始めてもらえるかな？」

「まずは、これを」

志月に報告書が入った封筒を渡して飛鳥にも封筒を渡す。

「……………」

封筒の中にある書類を見て飛鳥の表情が変わる。

「流、これは事実か？」

「事実だ。複数の封地、霊地が何者かによって壊されていた。ただ、完全破壊ではなく一部の破壊だったので発見が遅れた」

「流君、一部の破壊とは？」

志月が確かめる様に問いかける。

「気脈を安定させる陣が一部だけが破壊されていた。陣の修復はもう完了しているので気脈は安定している」

「最近まで気脈が乱れていたのか？まさか……妖魔の大量発生は」

「飛鳥の想像通り、気脈の乱れが原因だろうな」

妖魔の出現には気脈の流れが関係あると言う説が退魔組織内では有力な説であり、気脈の乱れで妖魔が大量発生した可能性が高い。

「水瀬の管轄内の封地、霊地は警備の強化をして貰えますね」

「当然だ。……流君、陣を破壊した者達については何か解っていないのか？」

「・・・未確認な情報だから、あくまで可能性だけど・・・魔闘士が破壊した可能性あり」

「！」

流を除く、全員が驚く。

自分達と同じ魔と闘う者が気脈を乱して妖魔を発生させた可能性があるとは。

「今の所は可能性だけ・・・事実はまだ解らない」

「・・・人工妖魔については？」

飛鳥がもう一つの疑問を聞く。

「調査中でまだ何も解っていない」

「・・・そうか」

気脈を乱した者達と何かしら関係があるかと思っただが現状では不明の様だ。

「・・・俺に依頼が来ているのだっとな」

「ああ。多分、その二人にも来るだろうから一緒に聞いてくれ」

春那と春華にも仕事が来る予定でもある様な、流の言い方。

「国からの依頼で『陽月学園』に転入して欲しいそうだよ」

「・・・陽月学園？」

陽月学園、日本で唯一の魔闘士育成機関であり、日本各地から素質ある子供を集めた大規模な学園。  
表向きは小、中、高一貫の進学校である。

「あの地は火桜一族の管轄内だが・・・奴等は反対しないのか？」

火桜、同盟に所属していない五大勢力で炎術に長けた一族である。  
そして、どういう訳か天武を嫌っているので、天武の次期宗主である飛鳥が来るのを快く思わないだろう。

「言つたろう、二人に関係あるって」

「？」

「天武、真風、地静の次期宗主に学園に来る様に、という内容で依頼が来た。」

この分だと水瀬にも来るよ。火桜はもういるらしい」

「・・・本当か？」

飛鳥が思わず聞き返す。

退魔五大勢力の次期宗主を集めるなどその地で問題が起きているという事を言っているのと同じである。

「だから、言つたろ？厄介事だつて」

爽やかに言う、流を見て確かにと思う一同だった。



## 第七話『帰郷』

「高い所は良いな」

「そうか？」

京都行きの飛行機内で窓の外を見て呟く、流に疑問の声をかける飛鳥。

「飛鳥さんは高い所は嫌いですか？」

春華が意外そうに聞く。

「別にそう言う訳ではない。乗り物に乗るのが好きじゃないだけだ」

「自分で歩くのが好きなのか？」

「運転できるなら別かも知れないがな」

春那の問いに適当に答える。

何故、二人が京都行きの飛行機内にいるかと言うと。

転入の準備をする為に家に帰る、飛鳥に訓練をつけて貰うため、という名目でついてきている。

「（少し位なら、休んで良いのだが・・・二人とも熱心だな）」

結局二人にも依頼が来て、二人とも陽月学園に転入する事になったので向こうで続きの訓練をしよう、と提案したが二人とも付いてく



る、と言って聞かないので一緒に行く事になった。  
それだけではないが飛鳥には他の理由は解らない。

「飛鳥に一撃入れたら、婚約者が決まるだよな？  
それなら、俺が飛鳥の弱点を教えようか」

「いいの!？」

「是非!」

「流!」

行きと違って賑やかな帰りとなりそうだ。

天武邸

「ようこそ、天武へ」

「お世話になります」

「よろしくお願いします」

客間で飛燕が春那と春華に挨拶を交わしている頃、飛鳥は

「飛鳥!さつさと、準備しろ!」

「少し待て」

何処かに出掛ける準備をしていた。

「何で、これからお別れ会なんだ？」

「クラスの奴に話したら最後に騒ごうって事になったからな」

「それは聞いた。何で俺が帰ってすぐなんだ？」

「クラスの全員が空いてる日が今日だけだからな」

クラスの友人が二人の転校の話を聞いたら、最後に騒ごう、と送別会を開く事になった。

「どうせ、騒ぐ口実が欲しかったんだろ」

「とか、言いつつ嬉しいくせに」

「・・・行くぞ」

「照れるなよ」

照れる飛鳥の後についていく、流だった。

その頃、客間

「転校の準備の為とはいえ、修行を中断させてしまったすまない」

「いえ、気にしてません」

「そう言って貰えると助かる」

「それよりも飛燕さん、飛鳥に一撃を入れるにはどうしたらいい？」

「そうだな・・・」

飛燕がいい方法を教えようとするが

「・・・教えるなよ、親父」

客間に入って来た飛鳥がそれを止める。

「ダメか？」

「ダメ。じゃ、出掛けてくる。・・・二人も来るか？」

春那と春華を誘うが

「クラスの友人との別れなんだから私達を気にしないで楽しんできなよ」

「そうですよ。飛鳥さんも私達の送別会に気をつかって出なかったですから」

「そうか。じゃ、行ってくる」

そう言って、出掛ける飛鳥。

「飛鳥に一撃を入れるコツは、ダメだけどアイツの昔話でもしようか」

「良いんですか？」

「暇潰しにはなるだろう」

「飛鳥の子供の頃・・・少し気になる」

春那は興味が出てきたのか、楽しそうだ。

「飛鳥な、子供の頃は・・・」

その頃、飛鳥と流。

「！・・・誰か、俺の話をしているな」

「何で？」

「直感で・・・」

「・・・気のせいだろ」

実は当たりとは流石に思わなかった二人だった。

「昔は、母親にべつたりと言うか母親がべつたりと言うか？何時も一緒にいたな」

飛鳥の母親は本当に飛鳥を大切にしていた。

「よく、飛鳥を連れて世界中を旅していた。  
そして、帰って繰る度に飛鳥が何処かの民族衣装だったな」

懐かしむ様に話す、飛燕。

「お陰で、俺には余りなつかかった。

修行の時は尊敬の眼差しで見てくれたが、それ以外はどうしても母さんの方を尊敬していたな」

「飛鳥の母さんか。・・・今は何を？」

「・・・わからん。

また世界を見てくる、と言ってから半年以上も家に帰ってきていない。

たまにお土産を送ってくるから元気なんだろうが」

「・・・放浪癖が有るですか？」

「人生は旅・・・と言うのがアイツの生き方らしいしな」

苦笑して答える、飛燕。

「だが、飛鳥にも友ができると余りべつたりじゃなくなったな。  
やはり、友と一緒にいる方が楽しかったんだろう。

あの頃のアイツは・・・」

飛燕の話は長い話になりそうだ。

「飛鳥、なんで転校するんだよ？」

「寂しくなるね」。流君も元気に学園生活を送りなよ」

クラスの友人が飛鳥と流にそれぞれ別れを告げていた。  
そして何故か、学校で送別会が開かれていた。

「流・・・なんで学校？」

「先生も参加したいからだそうだ。それに飛鳥は、ここが一番馴染むだろ？」

飛鳥と流の担任は騒がしい事が大好きな人だった。

「後でカラオケとかも行くから・・・とか、言ってたな」

「・・・騒がしい夜になりそうだな」

「楽しい夜なりそうだけど？」

気が重い飛鳥と楽しいそうに笑う流。  
此方も長い夜になりそうだ。

## 第八話『魔人』

夏休みも後、僅かになった頃のある夜に飛鳥と流はある封地に向かっていた。

「後二日で転校だつてのに仕事に行かせるか？」

不満そうに呟く、流。

「愚痴を言つな」

と言いつつも飛鳥も余り乗り気ではなさそうだ。

「でも、あの封地はそれほど重要ではないから、後回しにして忘れていたって・・・明らかに職務怠慢だろ？」

「・・・それ以上言うな、虚しくなる・・・」

流石の飛鳥も後始末する事には乗り気ではない。  
本来なら、予定が空いている者を送るのだが・・・

「封地、霊地に警備を送る前に思い出して欲しかった・・・」

流が半分呆れて呟く。

各地の封地、霊地に多く魔闘士に送ってから思い出したらしく、二人が行く事になった。

「忙しいのは、解っているだろう。・・・もうすぐ着くぞ」

飛鳥がフォローを入れて、目的地の地図を見て確認する。

古びた神社

「あゝ、うん。忘れて仕方ないな・・・これは」

流が神社を見て呟く。

かなり古くからある様だが管理している者がいないのであれ放題である。

「此処の管轄って、天武だけ？それとも俺等？」

「どちらも違う。元々、この場所を管理している者がいたが、何十年か前に亡くなったらしい。

重要な土地ではないが、仮にも封地なので近くにいる天武、真風が見張る事になった場所だ。あくまでも見張る場所の有って管轄ではない」

「詳しいな」

「いつだったか、話を聞いたからな。

・・・さっさと直すか」

神社の方を向き歩き出す飛鳥に流がついていく。

「・・・・・・・・此処だな」

飛鳥、神社の前で立ち止まって地面を見る。



そして、片膝をついて片手を地面に当てながら軽く目を瞑る。

「直ぐに直るか？」

「ああ。この土地に刻まれた陣の力を活性化すれば直ぐに直る」

流の問いに直ぐに答える。

気脈を安定させる陣は、土地そのものに刻まれている。

そして丁度、飛鳥が手を当てている所が刻まれた陣の中心であり、そこから陣の異常を調べたり、修復したりなどをする。

「ただ、力をかなり使いそうだ。・・・流、辺りを警戒しておいてくれ」

「それより、俺も手伝おうか？」

「二人して無防備の状態にいる気か？」

目を開いて、流を見る。

修復中は気を陣に送る為、奇襲に有ったら直ぐに対応できない。二人でそんな状態でいたら危険でしかない。

「それもそうだな」

「作業に移る。警戒を怠るなよ」

「了解」

流の声を聞いて、再び目を瞑る。そして地面に着けた片手の掌から大量の気を送り込む。

(・・・予想以上に気を消費するな)

修復自体は上手く言っている。予想以上に気を消費しているのが計算外だったが、このままなら数分位で陣が活性化して元に戻るだろう。

「・・・飛鳥、どうやらお客さんが来たようだ」

流が両手に風を溜めて飛鳥に話し掛ける

「敵か？」

作業を続けながら、流の方を見る。

「多分ね。飛鳥は陣の修復を優先しておいてくれよ。やり直したと飛鳥の疲労がバカにならないだろう？」

「・・・そうさせて貰おう」

「・・・来るぞ」

真剣な顔つきになった流が此方に歩いてくる人影を睨む。

「・・・そんなに睨まないでくださいよ」

流が睨んでいた人影から声を掛けてきた。

その声はどこか幼さが残る声であるが流も飛鳥も警戒している。

「君は何者かな」

「通りすがりの人です」

流に答えると同時に姿が見えてくる。

まだ中学生位の年頃で真紅の髪に黒い瞳を持ち、黒を基調として赤の装飾を持つ服を着ている、少年だった。

「通りすがりの人にしては随分な邪気だな」

流が両手の風を更に溜めながら言い放つ。

目の前の少年は人間には持てる筈がない程の邪気を見に纏っている。

「それなら……人ではなく、魔人に変えますよ」

「魔人だと？」

飛鳥が確かめる様に呟く。

魔人、魔に落ちた魔闘士。力だけを望み、魔に己れの魂と肉体を捧げた存在。

「はい。魔人です」

もう一度、言う少年の顔には笑みで有るが、その言葉には紛れもなく真実であることを確定させる程のプレッシャーを二人が感じる。

「じゃ……魔人君？此処に何か用かな？」

「ええ、少し気になる事にありました」

（……通りすがりの魔人ではなかったのか？）

二人のやり取り見て、ズレた感想を思う、飛鳥。  
先ほどの冗談を真に受けた様だ

「此処の封地だけ修復だけ随分と遅かったので何かあるのかな？・・  
・と思ひまして」

「ただ忘れていただけだ。誰かが各地の封地と霊地の気脈を乱して  
大変だったからな」

「それは、すいません。もう少し考えて行動するべきでした」

「君がやったのか？」

目の前の少年が破壊した可能性を予想していたので驚かず確認する。

「ええ、僕がしました」

「なんでそんな事を？」

「今は秘密です」

流の質問に笑顔で答え、飛鳥の作業に視線を移す。

「ところで、そろそろ修復は終わりますか？」

「・・・ああ、後一分位だ」

突然の質問に意外に感じた飛鳥だが、それに答える。

この少年は今、飛鳥がしている事にさほど興味がなかったのか

「そうですか」とだけ言い、飛鳥と流の二人を見比べる。そして、急に何か満足した笑顔になる。

「その作業が終わったら、どちらか僕と殺し合いしてくれませんか？」

笑顔でそんなこと言うてくる。

「何？」

「それは、一対一か？」

流は明らかに疑問の声で、飛鳥の方は案外、乗り気である。

「ええ。一対一でお願いしたいですね。でも出来れば貴方ではなく、両手に風を溜めている貴方に相手をしてほしいですね」

「何故だ？」

自分ではなく流の方を指定して来た、少年に問い掛ける。

「修復で多くの気を使った貴方を倒しても・・・満足できませんから」

「大した自信だな。お前が強いのは気配で解るが・・・俺を甘くみるなよ」

明らかに自分の方が勝つ、という少年の態度に少し怒りが出たのか、声が少し苛立つ。

「・・・どうやら不快な気持ちにさせてしまった様ですね。僕も本音を言えば貴方と戦いが・・・できることなら対等な状態で殺し合いたいのです」

その言葉には偽りは感じられず、単純に闘いたい事を感じられる。

「・・・いいだろう、流」

対等な殺し合いを望むには確かに今の自分では気を消費し過ぎたので、相手の要求通り、流に譲る。

「わかってる」

「任せたぞ」

流の返事を聞いて、丁度よく修復が終了して流の背後に移動する。そして、向かい合う流と少年がお互い視線を交差させる。

「感謝します。頼みを聞いてくれて」

「気にしなくて良い。元々、飛鳥を戦わせる気なんてなかったからな」

流は少年の言葉に返事をして少年を睨む。

「ただ・・・一つだけ、言わせて貰う。俺は確かに飛鳥よりは弱いかもしれないがそう簡単に勝てると思うなよ」

「貴方が強い事は対峙して居れば分かりますよ」

笑顔のままだが、そこに油断など慢心は感じられない。流を強者と認め全力で戦う事になることを純粹に喜んでいる様に見える。

「戦う前に、名乗りあいでしょうか？そちらの方がムードがですし」

「良いな、それ」

少年の提案に賛成する、流。

「では、僕から・・・火桜焰です」

少年、火桜焰ひようへんの名を聞いた瞬間、飛鳥と流に驚いた様に少年を見る。

「火桜、五大勢力の火桜か？」

「勘当されたので無関係です」

「・・・まあいい、殺し合いに生まれも何も関係ない」

流は真実を確かめるより、焰を倒す事を優先する。

「俺は、真風流だ」

「では・・・」

流の名を聞いて、片手に炎を出す焰。流は両手に溜めた風を自身に纏わせる。

「初めましょうか」

「ああ」

その言葉の直後、炎と風が激突しあう。  
今、殺し合いが始まった。



## 第九話『本気』

交わる炎と風が爆風となり辺りに届き。交わる殺気が、二人の殺し合いを見ている飛鳥に届く。

「流も本気で殺す気だな・・・」

久しぶりに本気の殺気を出している流を見て、飛鳥が予想していた以上に焰の戦闘力が高いことを感じる。

「俺も戦ってみたいな」

強者と戦いたい気持ちは、飛鳥も理解できた。だからこそ、一対一を認めて今は傍観者でいる。

「流に修復を頼めば良かった」

そんな事を呟いている飛鳥をよそに、いまだに殺し合いは続いていた。

「強力な炎だな！」

「貴方も良い風です」

風を纏い、片手に風を溜めている流と両手に炎の纏って構えている焰がお互いに、世辞ではなく本心で誉める。

「・・・一つ聞きたいんだが」

「何ですか？」

「何で、魔に墜ちた？お前は魔に墜ちなくてもかなりの力の持ち主だと思うけど」

流の疑問、人として強さより魔として強さを求めた焰。例え、魔人となっても人の時が弱ければ大した強さにはならない、その事から人の時からかなりの実力があつたと思われる。

「……人は愚が存在だ、と悟つたのです。そんな存在でいる自分に嫌気がさしたんですよ」

焰の目に絶望が映る、その闇は深く何を考えているか解らない。

「愚か、か……否定はしない」

「おや？意外ですね。てつきり、否定するかと思いました」

「俺達みたいに闇の世界に居れば、人間の汚いところは嫌でも目に入るからな」

「でも、貴方は魔闘士をしているのでしょ？人を守る為に」

「俺は全ての人間を守りたい訳でもないんだぜ？守りたい者だけを守る事が出来れば良いからな」

流は、自分にとって大切な者を守るために戦っている。全ての人間を守りたいなど考えたこともない。

「……守りたい者？」

「友人、両親、可愛い女の子とかね」

「理解できません。人は裏切り、妬み、憎しみ合う・・・そんな存在を守りたいなんて理解できない」

焰の顔には笑みがなく本当に理解できない、とばかりに悩みの表情が現れる。

「・・・そろそろ、再開してもよろしいですか？」

悩みを打ち消すかの様に流に問い掛ける。

「ああ」

流の返事を聞くと、一瞬で間合いを詰めて炎を纏った拳を顔面に叩き込もうとする焰だが、咄嗟に後方に跳んだ流には当たらない。

後方に跳んだ流は片手に溜めていた風を風刃にして飛ばす、焰は焰を纏った片手で弾き飛ばす。

その弾き飛ばした瞬間、今度は流が間合いを詰めて掌を胸に叩きつける。

「グッ!!」

焰が少し後ろに引くが、両手の焰を球体状にして投げ、それを流が回避しようとした瞬間。

「な!？」

大爆発する。

火桜の炎術、炎爆。球体状に圧縮した炎を爆発させる。一瞬で炎に呑み込まれた、流だがすぐに炎から現れる。

「危なかった……。風を纏ってなかったら死んでたな」

所々、服が焦げているが致命傷はない。

「今ので死にませんか」

「俺は死ぬかと思ったよ。……お前はダメージなし？」

「いえ、胸に掌をくらったのは痛かったです」

「痛いので済んだか、風を溜めてなかったらとはいえ結構、本気だったんだけどな……」

再び風を手に溜める流だが、焰は手に炎を纏っていない。それどころか構えてさえいない。

「炎術は使わないのか？」

不思議に思った、流が問い掛けるが

「見ていれば分かりますよ……」

そう言った瞬間、両手から炎を出して、その炎を下に伸ばす。一定の長さになると停止して、その炎の形のまま構える。その姿は……

「炎の双剣士みたいだな。なかなか、格好良いぞ」

二つ炎の剣をもつ、焰の姿を見て、流が呟く。

「そうですか？・・・それよりこの炎剣どうですか？魔人になつてから作つた技なんですけど」

「それもなかなか、だな。性質変化、形体変化の応用か？」

「そうです。今、この炎は斬ると燃やすを同時にできますよ」

爽やかな笑顔で答える焰に苦笑する流。

「そいつは恐いな」

「そうですか？まあ身を持つて実感してください」

そう言つた瞬間、炎の双剣を構え流に斬りかかる。

流は片手の風を風弾にして放つが双剣によつて切り裂かれ消滅する。

「出る！天風！」

風弾を切り裂かれた瞬間、自身の武器である鞘に収まつた天風を喚び出し柄を握り締めて双剣の刃に合わせて切り返す。

「刀ですか？」

双剣を切り返された、焰は一旦間合いを開けて聞く。

「ああ」

短く答え、刀を鞘に戻し少し腰を落として抜刀体勢をとる。

「なるほど、一撃勝負と言っ訳ですか？」

「そんなところだな。あんまり長引かせる、と術の力の差が多くなるんでな」

まだ、表に出てないが確實自身の方が力を消費している、と悟った流はまだ力が残っている内に決着をつけることにした。

「いいですよ。一撃勝負でいきましょう」

そう言った瞬間、炎の双剣が更に力を増したように激しく燃え上がる。

「負けられないな」

大量の風を纏い、力で対抗する。流を中心とした竜巻の様に風が激しく吹き上げる。

「いい風ですね」

「褒めるには早いな」

更に風が強くなる。

「！まだ余力があるんですか？」

「いや、俺の力だとの辺りが限界」

そう言いつつも更に風が強くなり続ける。

「・・・・・・・・」

「不思議そうだな。どうして風が強くなり続けているか。種明かしをしよう」

不思議そうな顔をしている焰に手品の種を明かすように話しかける。

「この天風は天武の次期宗主が作った」

「天武・・・？まさか！？」

「ご想像通り、天武の作る武器には何かしらの能力がある。因みにこの天風は風の力を増幅してくれる」

特殊武装の製作、天武が独自に考え、自身の使う武術、体術に合わせ造っているなかで出来上がった技術。

「天風の欠点としては、かなり集中しないと暴走する。・・・今の俺が制御できるのはここまで」

「・・・厄介ですね。僕も限界まで力を出させて貰いますよ」

炎が爆発的に増加し、自身も炎を纏う。

旋風と業火がお互いに衝突しあう。

「「勝負！」」

旋風を纏いし流と業火を纏いし焰が叫ぶと同時にお互いに間合いを詰めて交差する。

「・・・・・・・・」

刀を振り切った流と炎の双剣を振り切った焰はお互いに背を向けて沈黙している。

「・・・強いな、お前」

沈黙を破った流が称賛した瞬間、風が拡散し地面に倒れる。

「貴方も」

焰は倒れそうになるが炎の双剣と業火を消して倒れかけるがなんとか耐えている。

「脈あり、腹部に重度の火傷。・・・やばいな、速く治療しないと」

倒れた流に駆け寄り、状態を確認した。飛鳥は流を肩に担ぎ去ろうとするが

「貴方は僕を殺さないのですか？」

ふらつきながらも飛鳥を見る。

かなりのダメージを受けた焰なら今の飛鳥でも一撃だろう。

「・・・全力の俺と戦いたいのだろうか？俺もお前と全力で戦いたい」

「・・・」

「それに・・・お前は俺達と同じだからな。強い奴と本気で戦いた



い、お互いに殺す気だが、生死にそれほど執着がない。俺達と同じ  
ただのケンカ好きだな」

飛鳥が言ったことはなんとなく当たっていた。

もし、流を殺す気なら飛鳥が流に近づく前に攻撃しただろう。

「ああ、ここの陣は壊さないでくれ。直すのが面倒だから」

「・・・分かりました。・・・一つ、聞きますが貴方の名は？」

「天武飛鳥」

「飛鳥・・・。次に会うのを楽しみにしていいですか？」

「俺も楽しみにしてるぞ」

お互いに笑みを浮かべ、同時に去る。

「次に会うのが楽しみだ」

流を担ぎながら焰との再開を楽しみにする。

「俺も・・・リベンジするぜ」

「生き返った・・・？」

「最初から死んでねえよ！」

意識を取り戻した流に突っ込みを入れられる飛鳥だった。



## 第十話『学園』

「此処が、陽月学園・・・」

白を基調とした陽月学園の制服を着た飛鳥が今日から転校する学園を見て、呟く。

大規模な学園で施設も充実しているので希望者を後を絶つことはないらしい。

「今日から、新しい生活だな。学年は違うけどよろしく、飛鳥」

「姉さん！今日から飛鳥さんは先輩ですよ！ちゃんと礼儀を持って接しないと」

「飛鳥は細かいことなんて気にしないって」

「それでもです！」

飛鳥の両脇で、白い制服を着た春那と春華が言い合っているが、飛鳥は気にした様子もなく黙っている。

春那と春華は飛鳥と流より年下でこの学園の高等部の一年生として転入。飛鳥達は二年生として転入である。

「飛鳥は気にしないよな？」

「ああ。だが、二人とも浮かれすぎるな、一応仕事だ」

「わかってる」

「大丈夫です」

解っているのか、どうかは解らないが二人をよそに飛鳥は学校に向かって歩き出す。その後に二人がついてくる。そこに流の姿は見えない。

因みに何故、流がないかは・・・

## 回想

「少しの間、安静にしていればすぐに治るそうだな」

ベットの上で横になっている流に話しかける。

「でも、転入は遅れる・・・。まあ、少し遅れるだけか」

「まあ、のんびり休んでいろ」

流は焰との戦闘により自宅休養する事になってしまった。

「そうしたいけど、休んでいる暇がないんでな」

「・・・まさか、修行か？」

付き合いが長い飛鳥は流が何を考えているのかが解ったが、確認するように聞く。

「ああ、負けたままでいられるほど・・・」

「大人しい奴じゃない、か・・・相変わらず負けず嫌いだな」

「何を今さら」

「・・・傷はちゃんと治せよ」

「ああ。飛鳥はちゃんと仕事しろよ」

笑いながら言う流に、わかっている、と答えた飛鳥だった。

回想終了

（無理して怒鳴られてなければいいけど）

飛鳥が修行しているであろう流を心配している頃・・・

「怪我人は大人しく寝ていろ！」

「怪我人を殴るな！！」

「問答無用！！」

修行しようしていた流は、流の父、天駆てんくに怒鳴られるどころか、問答無用で殴られていた。

・・・このままなら、流が来るのは延期になるだろう。

「天武飛鳥だ。来たばかりでよく分からないことも有るがよろしく頼む」

自身が転入するクラスで軽く挨拶をする飛鳥。

クラスの反応は、まあまあ普通である。男子は野郎かよ、と言っている者いるし女子はタイプかも、と言っている者もいる。

「それじゃ、飛鳥君。氷上君の隣の席に座ってくれるかな」

眼鏡を掛けた担任が笑みを浮かべながら、席を言う。

指定された席に座った瞬間、隣の人が話しかけてくる。

「飛鳥だったよな？俺は氷上勇<sup>ひかみゆう</sup>だ。隣の席だから気軽に声をかけてくれ。後、呼ぶ時は名前で呼んでくれ」

「解った。俺のことも名前で頼む」

「OK。よろしくな飛鳥」

「・・・ああ。」

氷上勇、青髪に茶色の目を見て地毛か染めているのか悩みながら、答える。

その後、昼休みまでの休み時間中によってくるクラスの人に対応に困る飛鳥がいた。

昼休み

「疲れた・・・」

授業よりも人間相手の方に疲れている飛鳥だった。

「お疲れさん。やっぱ、転校生は目立つな」

「・・・そうだな」

勇に適当に答え、この後の事を考える。

飯は持参して来なかったので、学食か購買部のどちらかで済ますかと昼食の考えている。

「飛鳥先輩！」

「飛鳥！」

ドアの付近から聞き慣れた声が二つ聞こえ、そちらを見る、と春那と春華がいる。

「どうした？」

「一緒に昼飯食べない？」

「別にいいが、何処で食べる？」

「屋上にでも。それと、飛鳥さんのお弁当も作ってきました」

「！！？」

春華の言葉を聞いた瞬間、飛鳥自身、顔が青ざめていくのが解る。

「・・・どうした？飛鳥。喜ぶ所は有っても固まる所はないだろ？」

「そうだな・・・そうなんだよな・・・」

「??」

疑問を浮かべる勇をよそに二人の所に歩き出す飛鳥だが、その足取りは重そうだ。

「飛鳥、安心しろ。私がちゃんと見てたから、多分・・・大丈夫」

「・・・多分？」

小声で春那が言うことに、同じように小声で返す。

「その・・・骨は拾ってやる」

「不吉な事を言うな」

と言いながらも飛鳥もそうなる可能性を捨てきれないのだった。

「どうかしましたか？」

「・・・なんでもない」

「大丈夫ですよ。今度は、美味しい筈です！・・・多分」

顔に出ていたのか、春華が今度は大丈夫だと言うが、やはり不安が



消えない飛鳥。

「・・・期待しておこう」

「はい！」

笑顔で答える春華。

その十数分後、保健室に担ぎ込まれる飛鳥がいたが、保健室で済んだか、と感心していた。

## 第十一話『因縁?』

「大丈夫か? 飛鳥」

「・・・心配するな」

放課後、春那の肩を借りて歩いている飛鳥の姿が有った。

「・・・ごめんなさい」

「気にするな・・・保健室で済んだからな」

「飛鳥、フォローになってない」

飛鳥の言葉に更に凹む、春華。

このままではマズイと判断した春那が話題を変える。

「これから、ここの魔闘士候補と会っけど、どんな奴がいるかな?」

「・・・面白い奴がいるといいな」

「面白い?」

飛鳥の言ったことに疑問で聞き返す。

「能力とか性格が面白い奴」

「いるかな?」

春那が苦笑しながら呟く。飛鳥としてはただ単に希望なのでいてもいなくてもいいらしい。

「しかし、特別活動部ってなんだよ」

「まさか、退魔部と名乗る訳にはいかないだろ」

特別活動部、陽月学園の魔闘士候補が所属する部活、主に能力の強化、戦闘技術を学ぶことを中心としている。

「そうだけど、なんか合わない」

「・・・そうか？」

「姉さんが細かいことを気にしすぎなんですよ」

特に名前を気にしていない飛鳥と春華はそんなことを考えていない。

「やっぱり、戦闘部とか分かりやすい方がいい」

「・・・せめて、武術部だろ」

分かりやすいが何か違う春那の案に悩む飛鳥だった。

「あ、着きましたよ」

春華がドアに『特別活動部』と書かれたプレートを見て呟く。

「じゃ、挨拶と行きますか」

「ああ。・・・肩をかしてくれてありがとう」

「礼なんかいらないよ」

肩をかりることをやめて、歩き出す飛鳥だが、少しふらついている。

「飛鳥さん。やはり、今日は休んだ方が・・・」

「安心しろ、顔合わせが終わったら帰る」

「・・・なら、いいのですか」

原因が自分だけに、どうしても心苦しい春華だった。

「失礼しまーす」

そんな春華をよそに、ドアを開けて教室に入っていく春那だった。その後を追うように飛鳥と春華が教室に入る。

「！」

飛鳥が入った瞬間、ナイフが飛んでくるが指でナイフの刃をとる。

「何のつもりだ？」

ナイフが飛んできた方を見て聞く。

中には十人位の人数がいたが、皆でナイフを投げた人物を見ている。部屋にいた人達にとっても予想外の行動だったらしい。

「・・・お前か、地静陸」

「・・・・・・・・ウン」

金髪、茶色の瞳を持つ、中学生位の少年、地<sup>ちせい</sup>静<sup>りく</sup>陸が頷く。

「お前！飛鳥に

「怒るな、春那」・・・え？」

陸を怒鳴りつけようとした春那だが、ナイフで攻撃された飛鳥が止めた。

「ナイフで挨拶するな。後、賭けはあくまでも武器なしでだ」

「・・・・・・・・」

無言で頷く、陸。

どうやら、挨拶でやったことらしい。

「飛鳥さんの知り合いですか？」

「こいつは地静陸、地静の次期宗主だ。昔、地静の所に武器製作で会ったから間違いない」

地静、地術に長けた一族であり、五大勢力の一つ。

「陸とは賭けをしている。俺に一撃を入れたら天武の奥義を教えるって」

「賭けで奥義を教えるって・・・」

呆れながら、春那が呟く。先ほどのナイフは挨拶の他に賭けでもあったらしい。

「・・・・・・・・誰？」

陸が春那と春華を見て飛鳥に聞いてくる。

「水瀬春那と春華だ」

「・・・・・・・・」

会話が続かない。

「詳しい紹介はこの人達も含めてやろう」

「・・・・・・・・ウン」

とりあえず、その場に全員で自己紹介をしていく、事になった。氷上勇がいたことには少し飛鳥が驚いていた（あまり、強い気配を感じなかったのだ）。

「アレ？火桜っていないの？」

一通り自己紹介が終わった直後、春那が疑問の声を出す。

「ああ、アイツなら」

「遅れた！？」

勇がそれに答えようとした瞬間、ドアが激しく開かれて一人の少女が入ってくる。

「ごめん、人を探してたらちょっと遅れた」

真紅の長髪に黒い瞳の少女、春那と春華と同じ位の歳の様だ。

「お前が火桜か」

「お前は・・・天武！」

「・・・なんで解る？」

「敵の天武次期宗主の顔くらい知ってる！」

飛鳥のことを敵として見ている火桜の少女。なんで敵として見られているかは飛鳥は解っていない。

「・・・俺達、天武が何をした？」

「忘れたのか！？過去にあった火桜と天武の争いを！？」

二百年前に天武と火桜は有ることを切っ掛けに能力者同士で殺しあっていたが・・・。

「・・・俺の記憶にはないな」

「・・・まあ、二百年の前のことだしね・・・。グチグチと気にしてる火桜の方がおかしいだね・・・。」

先祖のした事にわざわざ付き合いたくない様子の二人。

「そもそも、分家の一部がグタグタ言ってるだけで気にしてる方が少ないってのに」

「天武では、なんで争ったかすら覚えていないぞ」

「そう言えば、なんでだろ？ノリかな？」

「そんな筈ない・・・と言い切れないな・・・」

喧嘩上等な天武に、好戦的な火桜・・・ノリで大規模な戦闘になってもおかしくない。

「まあ、いいや」

『（いいのか！？）』

喧嘩売つといて、やめる火桜の少女にその場にいた全員が内心突っ込むが喧嘩が起きなければいいのか口にしない。

「真風の奴に用があるけど知らない？」

「流なら、怪我で学園に来るのが遅れる。・・・俺も一つ聞きたいが『火桜焰』を知ってるか？」

「！！！？アイツに何処であつた！？」

「封地の一つだが・・・やはり、火桜の者か」

火桜の少女の反応から、焰が火桜の身内のものと判断した。



「あ、あの」

「なに！？今取り込み中！！」

「こ、ごめんなさい。ですが・・・貴女は？」

「・・・自己紹介」

春華と陸が火桜の少女に自己紹介を求める。確かに現在、火桜の関係者しか解っていない。

「え？そういえば名乗ってなかった。火桜ひざくら陽光ひかり。よろしく」

火桜陽光、飛鳥達が思っていたことと違いかなり友好的な挨拶だった。火桜は天武を嫌っているのはもう過去のことなのか？と悩む飛鳥達だった。

## 第十二話『敵?』

本来なら顔合わせを終わらせて帰る予定の飛鳥だったが焰の情報をえる為に場所を変えて、春那達を含め、陽光と話していた。

「あのバカ・・・」

一通り、飛鳥が焰と接触した時の事を話した。

「火桜焰って陽光のなんなの？」

「・・・・・・・・身内？」

疑問の声で問い掛ける、春那と陸。

「・・・・・・・・姉弟よ」

「本当か？俺の話した奴がそうなのか？」

飛鳥の問いに無言で頷く陽光。それを聞いて飛鳥が眉をひそめる。

「・・・・魔人化は、存在そのものが禁断の秘術として現在では、ある書物にしか書かれていない筈だ・・・」

「闇の書物のことですか？あれは、おとぎ話では？」

「そうだよ。魔闘士が魔に墜ちた実例は幾つかあるし、どうしておとぎ話のものがでてくるのさ？」

春華と春那が疑問の声を上げる。

闇の書物、名前は正式なものではない。また、正式な名前は不明とされている本であり、魔闘士達が語るおとぎ話に出てくる『闇が封じ込められた本』として実在しないとされる本である。

「魔闘士が魔に墜ちた場合、ある変化がある。一つは体が魔物、妖魔に近い状態になるか、もう一つは人格が崩壊して全く違う者になる。両方起こる場合はあるらしいが、魔の力だけ手に入れ、変化しない筈がない・・・例外を除いて」

「・・・・・・・・外法の書」

「地静ではそう呼ぶのか？」

「・・・・・・・・ウン」

一族や地方によって、名前も違うが余り良い意味の言葉は使われていないのは変わらない様だ。

「それがどうしたのさ？」

「俺が話した『火桜焰』が陽光の知る『火桜焰』と全く同じなんぞ」

「・・・・・・・・容姿、性格、同じ」

飛鳥と陸が言いたいことが解ったのか、陽光を除く二人がハッ、となる。

「だから、変化に闇の書物が使われた、と言いたいの？」

「存在そのものは確認されていないが、おとぎ話の内容にあったらう？『闇の書物は、破壊を望むもの者をその望みを持ったまま魔人した』」

「そうだけど・・・」

春那はまだ納得していないが理解はしたようだ。

「今俺が聞きたいことは、一つだけだ、火桜は闇の書物に関する情報を持っているか？」

「情報じゃなくて、実物があつたの。・・・盗まれけど」

「何だと・・・？」

陽光の言葉に驚くと同時に眉を潜める飛鳥。

「言つとくけど、私は内容は知らないよ。そもそも、その書物ありかを知っていたのは現宗主である母さんだけだったんだから」

「だったら、なぜ盗まれた？それ以前に本物なのか？」

「何処で情報が流れたかは不明だけど、盗んだのは焰とその共犯者なのは間違いなし。本物かどうかは焰を見たなら解るでしょ」

「待て、共犯者？」

思わず聞き返す。共犯者など今聞いたことだ。

「まさか、私等が焰一人になにもしないでただ盗まれていくのを見てたと思う?」

「まあ・・・確かに」

本の詳細は本当に知らなくても、泥棒、侵入者なら対処する筈なのだから。

それに焰がいかに強力術者でも、一人では不可能だろう。

「共犯者ってどんな奴なの?」

「妖魔使い・・・かなり凄腕の術者」

「妖魔使い?・・・また随分と懐かしいね」

春那が懐かしそうに呟く。

妖魔使い、かつて妖魔達を封印し使役した術者達であるが、妖魔使いの能力の低下や妖魔自体にも耐性が出来てしまい、今では極僅かにしか存在していない。

「妖魔使い・・・そういえばそんな術が有ったな。・・・待てよだとしたら・・・だが、妖魔達を融合させることなど可能なのか?新しい術か?そもそも妖魔使いについては余り、その手段などは不明な点があるし・・・」

「飛鳥さん?」

妖魔使いのことを聞くと何やら思い出した様に呟き始める飛鳥。

「悪いが確かめたいことができた。教導の方は頼む」

突然、立ち上がり部屋から出ていく飛鳥とそれを見送る四人だった。

「・・・教導を頼む、と言われても」

「何からしましょうか？」

「最初は術の相性でも調べたから、違うこと」

春那、春華、陽光がこの後のことについて話し合い始めた。  
その中で陸が立ち上がり

「・・・・・・中等部に戻る」

「陸君は参加しないの？」

「・・・・・・中等部も・・・あるから、特別部」

それだけ言って部屋から去っていく。

「陸君だけで大丈夫でしょうか？」

「中等部には教官いたから大丈夫だと思うけど」

「教官？高等部にはいないのですか？」

「高等部の教官は出張でいないだけだよ」

「それより、どうする？」

全員で悩む。・・・余り教えることに経験がないので仕方ないが前

途多難である。

「親父か？・・・少し頼みたいことがある」

飛鳥が父親である飛燕に頼み事の為に電話をかけていた。

「妖魔使いに関する情報を集めて欲しい。どこまで？・・・とりあえず、術についてと現在の妖魔使い達の情報。・・・なんで？実は・・・悪い、客がきた。また後でかける」

携帯を仕舞い、辺りを見渡す。

敵意は無いようだが何かしらの用があるらしく此方を見ている者がいるのを感じる。

「・・・用が有るなら出てこい。調子が悪いから早く帰りたいんな」

少し、不機嫌そうに呟く。実際、調子が悪いので早く休みたいと本気で思っているのですまらないことに時間を消費したくないのであった。

「・・・魔狼」

片手に銀色の銃、魔狼を呼び出して・・・

「用が有るなら出てこい。これが最後の警告だ」

警告と言うより脅しの言葉を放つが辺りには人影すらない。

「……………」

無言で何もない空間に魔狼を向けて撃つ、撃つ、撃つ。三発の気の弾丸は、何もない空間に当たる。何もない筈なのに当たる。

「痛！・・・普通、撃つか？可笑しいだろ、学園内で発砲って危ない奴として見られるだけだ・・・うわ！」

何もない空間から声が出てくるが、今度はその空間の地面を狙って射つ。

「危ないって、姿現すから少し待て」

「黙れ。警告はした」

今度はもう片手に銃を呼び出し、双銃を地面に向けて乱射する。

「あぶ、危ない！お、脅しだろ！あれは！」

「警告も脅しも変わらん」

「頼むから、話だけでも聞けって！！」

「・・・なら、まず姿を見せろ」

乱射をやめて銃をおろして声の方を向く。  
空間が歪み、マントと仮面をつけた男の姿が現れる。

「初めまして、私の名は仮面マイケル・・・うわ！」



無言で再び銃を向けて撃つ飛鳥。

「明らかに偽名だろ」

「な、なぜ、ばれた!」

「……もういい。用件はなんだ?」

まともに相手をしていて頭が痛くなってきた飛鳥が頭痛を耐えながらマイケル?を見る。

「実は、勧誘に来たのだ。天武飛鳥君、我々の仲間にならないか?」

「……仲間に?なんのだ?」

「我々はこの世界をより楽しく、愉快なものに変えたいのだよ」

「聞けよ」

「具体的に言えば、この世界を本当の意味で弱肉強食の世界にした  
いのだよ!」

「……」

「力が強いものだけ生き、弱いものは死んでいく!

この世界を魔界のように妖魔達の社会の様に強いものだけが……」

「黙れ。俺はそんな世界はゴメンだ」

熱弁をしている、マイケル？に銃を向ける。  
今まで様に警告では、なく殺意を持って構える。

「・・・残念だ。だが私は諦めない！あの焰が認めた相手！仲間にしておいて損はない！また会おう、飛鳥君！！」

マイケル？がマントの中から、球体状の物体を出して地面に叩きつける。その瞬間爆音と共に赤い煙が辺りを包む。

「なっ！？・・・目にしみる！なんだこれは」

「唐辛子を入れた煙幕だ！！驚いただろう！？・・・目が痛い！？ゲホゲホ、去らば！・・・喉にもきた！？」

「・・・・・・・・」

自分でやっておきながら、自分が一番苦しんでいるマイケル？に呆れる飛鳥だった。

「・・・・・・・・何だったんだ。あの仮面野郎は・・・敵だよな？」

煙幕が晴れ、誰もいなくなった場所で飛鳥がポツリと呟く。それに答える者はいない。

### 第十三話『未定』

「・・・」

仮面マイケルと名乗る不審者と会ってから数日後。何かに悩んでいる飛鳥がいた。

焰と知り合いの様な発言に、妖魔達の社会、魔界など現状の情報だけでは不明なことばかりだった。飛鳥が悩んでいるのも頷けるが・

・

「まさか、一撃決められるとは・・・」

悩んでいたのは、全く別の事だった。

学園での教導が終わった後、飛鳥や他の次期宗主達で修行を行っていた時のこと。

「「飛鳥<sup>さん</sup>」」

「何だ？」

「そろそろ、決着をつけようと思う」

「いいですよね？」

「・・・ああ」

自信に満ちた春那と春華の顔を見て、多少の疑問を覚えたが何か秘

策でも有るのだろうと深く考えずに答えてしまった。

「あの程度で冷静さを失うとは、俺もまだまだだな」

刃など潰して殺傷性を低くした。練習用の武器を持って構えた飛鳥に二人が対峙する。

「？二人同時で戦うのか？」

「一撃を先に入れた方と婚約だからね、同時に戦っても問題ない」

「それもそうか」

二対一でも、先に一撃を入れた方なので防ぐことに全力を注げば恐らく防げると判断して答えたが・・・甘かった。

秘策が有ると考えていたが予想を遥かに越えた秘策だった。

春那と春華の一言が飛鳥の平静を完全に奪ったのだった。

「・・・・・・・・浮気者？」

「違う」

それを見ていた陸が呟く。

飛鳥が攻撃を防いでいたなかで二人同時に

「飛鳥<sup>さん</sup>の浮気者!!」

「何!？」

全く身に覚えがないことを言われ、戦闘に対する動作と思考が完全に停止してしまい・・・二人の攻撃を同時に受けてしまったのだっ  
た。

「まさか、あの二人があんな手段をとるとは」

「私もまさか、アレで成功するとは思ってなかったよ。いや、言  
つてみるもんだよね。」

「・・・お前の入れ知恵か、陽光」

笑いを堪えた陽光が飛鳥に話しかけてきた。  
どうやら、あの発言は陽光の入れ知恵だったらしい。

「まあいい。春那と春華は？」

「あの二人？まだ地下の訓練室で戦ってたよ。ホント、飛鳥の事が  
好きなんだね」

感心する様に答える陽光。

あの二人が同時に攻撃を当てた為、二人で揉めているらしい。

「地下の訓練室が壊れなければいいが・・・」

飛鳥がポツリと呟く。

学園の地下にある訓練室、いくら丈夫に出来ていとはいえ、実力者同士の戦いかなりの被害が出ると思っている。

「ところで、なんであの二人は、飛鳥の事が好きなの？」

「俺に聞くな」

「じゃあ、飛鳥はどんな人が好み？」

「好み・・・」

今まで、真面目に考えたことのないことに頭をかきながら考え始める。

「・・・恋愛、苦手？」

陸が悩んでいる飛鳥に問い掛ける。

「・・・そうだな、得意ではない。正直なところ、自分でも解らないな」

「解らないって・・・まあ、興味無さそうだよな」

何処か納得している陽光に、そう見えるのものなのか、と疑問に思う飛鳥だった。

「あの二人にも聞いて来ますか」

「暇人だな」

「暇だし」

そう言つて去つて行く陽光に見て、飛鳥が軽く溜め息を吐く。賑やかな奴だと改めて思う。

「・・・・・・・・また・・・・変なことに、なるよ」

「・・・・・・・・ああ、また陽光が何か吹き込むって言いたいのか。・・・・・・・・ヤバイかな？」

「・・・・・・・・ウン」

「・・・・・・・・行ってくる」

妙なことになる前になんとかしよう決めた飛鳥が地下の訓練室に行く為その場を去った。

一人となつた陸が・・・

「・・・・・・・・今度、試して・・・・みよう」

良からぬことを考えていたのは誰も知らない。

地下訓練室に着いた飛鳥が見たものは、また何か吹き込んでいる陽光と春那と春華の二人が真剣に話を聞く光景だった。

「やっぱり、もっと積極的にいかないとダメだね」

「・・・積極的ですか？」

「寝込みを襲うくらい」

「襲うの?!」

陽光の言葉に真っ赤になる二人。

この時は、まだ誰も飛鳥が聞いているのに気付かないでいる。最も・

「（何、襲撃だと・・・本格的に危ないな。部屋に結界でも張るか）

」

間違った解釈したのと身の危険からなのか、部屋の防衛を強化しようか悩み始める。

「いきなり、そう言うのは」

「じゃあ、普通に飛鳥と一緒に遊びに行くとか」

一気に普通の案になる。

それなら、と賛成する春華と

（襲撃はなくなったのか・・・？）

ズレた思考を持った飛鳥が安心する。

初めから襲撃じゃない、と突っ込み人がいない。



「飛鳥が、了承してくれるかな」

「春那ちゃん、意外と心配性だな。女性の誘い断る奴じゃないでしょ」

（出かける程度ならな）

「今度、飛鳥を誘って三人で買い物に行ってみれば、デートにはならないだろうけど、友好を深めるには充分」

今度は随分と普通の案に、意外だと思う飛鳥だった。  
浮気者と言わせたのは本当に冗談だったのかもしれない。

「しかし、両手に花という状態なのに飛鳥も消極的だよね。まさか・  
・本命が別にいたり・・・」

「それはない」

いい加減、様子見も飽きたので話しかける。  
飛鳥の顔を見た瞬間、三人が驚いた表情になる。

「あ、飛鳥さん？」

「なんだ？春華」

「何時からそこに・・・？」

「襲撃の所からだ。寝込みを襲うのはやめてくれ」

「お、襲いませんよ!!」

半分本気、半分冗談で言う、飛鳥に本気で否定する春華だった。

「飛鳥・・・本当に好きな人いないの？」

「自身の好みすら解らない俺にいうと思うか？」

「・・・いるわけないか。まあ、飛鳥は私の婚約者だしね」

「私ですよ。姉さん」

空気が重くなる。二人同時に殺気が出る。

「どっちが本妻で愛人予定？」

「・・・ハァー」

陽光の冗談に飛鳥が溜め息で返す。

婚約者が決まるのはまだまだ先になりそうである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0266d/>

---

退魔物語

2010年12月11日22時51分発行